

こ しんにちは つるおか

No. 113

絵本は親と子供を結び付けるもの

いわむら かずお さん

絵本作家。東京藝術大学工芸科卒業。1975年、栃木県益子町の雑木林の中に移り住む。『14ひきのあさごはん』で絵本にっぽん賞、『14ひきのやまいも』等で小学館絵画賞などを受賞。1998年、同県那珂川町に「いわむらかずお絵本の丘美術館」を開館。2014年、フランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章。つるおか森の保育フォーラムの講師として来鶴。東京都出身。



学生の頃、私は友達と一緒に、NHK総合テレビの幼児向け番組の絵を描くアルバイトをしていました。これが子供の世界との出会いです。1960年代後半になると、欧米のすばらしい絵本がたくさん翻訳出版され、絵本の魅力にひかれていきました。また、自分の子供が絵本を読む年齢になったことで、その大切さを感じるようになった。こうしたことが重なり、絵本作家への道を歩み始めました。

絵本作家デビューをした頃住んでいた東京の多摩丘陵には、都心では余り見掛けなくなった雑木林が多くありました。そこを歩くと、戦後の少年時代、杉並区の雑木林にある家で家族身を寄せ合って暮らしたことなど当時の記憶がよみがえってくる。自分の中の原風景の存在に気付きました。するとイメージが湧いてきて、自然の中で暮らすねずみの大家族の日常生活を描いた「14ひきのシリーズ」の基になる発想も生まれました。そして、「そういう絵本を描くには、

実際に雑木林の中で暮らした方がいいのではないかと考え、益子町に移り住むことを決めました。

絵本は子供にとっての大きな楽しみです。また、親と子供を結び付けるものでもあります。親に抱かれ、温もりを感じながら読んでもらう。そんなふうに親子で過ごす時間はとても大切です。子供の心に深く残りますし、生きていくための力になると思います。そして、質の高い美しい絵と言葉でできている絵本であれば、よりいいですね。

美術館には、幼い頃私の絵本を読んでいた読者の方々が子供や孫を連れて訪れます。親子3代、4代で同じ絵本の世界を楽しんでいるのです。絵本が持っている力はすごいですよね。「14ひきのシリーズ」はフランスやドイツ、台湾など海外でも出版されています。自分の作品が世代や国を越えて愛され読み継がれていることは、本当にうれしいことです。年を重ねていくのは大変なこともあります。これからも楽しみながら作品を描いていければと思います。



フォーラムの様子（1月31日/第三学区コミュニティセンター）

見につなげるものです。
現在、市内の51法人163の事業所が搜索協力登録機関となっています。

これは、認知症の方等の情報を事前に登録し共有することで、万が一の方不明になった場合、早期発見につなげるものです。

A “ほっと安心”見守りネットつるおかにご登録を

本市は昨年7月に、鶴岡警察署や鶴岡市町内会連合会、認知症家族の会等の関係団体と連携し、認知症の方やその家族を支援する取り組み“ほっと安心”見守りネットつるおか（鶴岡市徘徊 SOS ネットワーク）を始めました。

Q 認知症の母の徘徊が心配です

最近、認知症の母に家の中を歩き回る行動が多く見られます。家族で注意して見っていますが、もし家の外に出て徘徊し、行方不明になってしまったらと心配です。



市への意見や質問、広報を読んだ感想などをお寄せください。
◎送り先 本所総務課
☎25-2111内線316